

## 文学科 中学校一種・高等学校一種（外国語（英語））

### 【教員養成の理念】

本学は学則で、「教育基本法及び学校教育法の定めるところに従い、仏教の精神に則り、人格を育成するとともに、仏教並びに人文に関する学術を教授研究し、広く世界文化に貢献する」（大谷大学学則第1条）ことが大学の目的であると明記しています。この目的を文学の追究という方法によって実現しようとするのが文学科です。本学科は、日本と諸外国の文学を主な研究対象とし、それら文学作品の精読・分析・解釈・批評を通して、文学に関わる総合的な知見を修得すること、および豊かな想像力を培うこと、さらにそうした読解力の養成を通して、人間と社会と思想に対する深い理解と鋭い洞察力を獲得することもめざしています。

初代学長清沢満之は「開校の辞」において、本学が「他の大学とは異なりまして宗教学校なること、ことに仏教の中における浄土真宗の学場であります」と述べています。こうした仏教精神に基づく教育・学術研究という理念は、文学科の教員養成の理念でもあります。また、第三代学長佐々木月樵は「樹立の精神」において、本務遂行・相互敬愛・人格純真を三つのモットーとして掲げました。昨今の教育の現場は様々な生徒の対応に追われています。社会性の未発達、いじめ、コミュニケーション能力の低下、他者への思いやりの不十分さ、学力低下といった実に多種多様な問題を学校は抱えています。このような複雑な状況にあっては、専門的な知識を備えるだけでは不十分です。①高い教職意識と責任感を持つ（本務遂行）のは当然ですが、②コミュニケーション能力・対人間関係能力を通して他者を尊重し（相互敬愛）、③子どもたちの声に耳を傾けることのできる教員（人格純真）、すなわち本学の三モットーを具現化でき、かつ宗教的情操をもあわせもった教員の養成が必要なのです。

本学が仏教精神に基づく宗教的情操を培うことに主軸を置いていることはいうまでもありませんが、それと共に本学は、民族・人種・性・出自・思想・信条等における差別（意識）を撤廃すべく、講演・研究会等を定期的で開催して持続的に人権教育にも力を入れています。さらに近年、学習に対する能力と意欲とを兼備していることが必須条件ではありますが、本学では身体障害・精神障害・学習障害等のある者を積極的に入学させており、キャンパスでは学習面でも生活面でも、障害を持つ者と持たない者とが相互に関与・協同する形が常態化しつつあります。

それゆえ、文学部文学科に中学校教諭一種免（英語）／高等学校教諭一種免（英語）の教職課程を設け、英米文学に精通し、言語と文化に関する広い知識と洞察力、宗教的情操を身につけた人材を養成することは、本学における教員養成の理念を実現し、教職の専門性を高めるためにも不可欠であると考えています。

平成17年の教育基本法の改正、及びこれを踏まえた平成20年、21年に行われた学習指

導要領改訂とその適用においては、「21世紀を切り拓く心豊かでたくましい日本人の育成を目指すという観点」が重視されています。とりわけ外国語教育においては、この観点から教育の充実を図ることが求められています。「幼稚園教育要領、小・中学校学習指導要領等の改訂のポイント」によれば、「外国語教育の充実」は、中学校では聞く・話す・読む・書く技能を総合的に充実させること、より具体的には、語数を増加〔900語程度まで→1200語程度〕・教材の題材を充実させることと記されています。また、「高等学校学習指導要領の改訂のポイント」によれば、授業は英語で指導することを基本とし、さらに高等学校で指導する標準的な単語数を1,300語から1,800語に増加させることと示されています。本学科〈英文学コース〉が提供する学位プログラムは、原典を緻密に読解するという伝統を守りながら、言語活動に関する総合的な知見と英語を使用した指導を行うのに必要な語学運用力とを身につけさせるものであり、それはすなわち中学校・高等学校で求められる外国語教育の充実に資する教員の育成につながるものであります。こうした点にこそ、本学科が中学校教諭一種免（英語）／高等学校教諭一種免（英語）の教職課程を設置して教員養成を行う意義があると考えています。

### 【理念を実現するための教員養成の構想】

本学では、第三代学長佐々木月樵が示した目標のうち、「三モットー」に関して、全学共通科目として建学の精神を伝える「人間学Ⅰ」「人間学Ⅱ」を設け、全学生に対して「宗教的人格の陶冶」を行っています。また、教育の基礎理論に関する科目として「仏教と教育（中・高）」（必修）を置き、仏教的な人間観に基づく宗教的情操を培う機会を継続的に提供するよう、カリキュラム設定において配慮しています。「人間学Ⅰ」においては、日本語と英語が並記されたテキスト『大谷大学で学ぶ——建学の精神——』を使用し、東洋と密接なつながりのある仏教が東洋の言語と文化に限定されるものではないこと、西洋の言語と文化にも開かれたものであることを教えています。

こうした仏教精神・宗教的情操に関するカリキュラムに加えて、文学科〈英文学コース〉では、英文学・英語学に「概論」、西洋の文化・社会・歴史を学ぶ「講義」、英語のコミュニケーション能力や読解力を育む「実践研究」の科目をそれぞれ設定しています。また、上記の学科専門科目に加えて、教科に関する科目として現代総合科目「コミュニケーション系」の中に、レベル別の英語会話（初級・中級・上級）を設けています。

英米の文学を学ぶことは、西洋の言語・文化・歴史にふれることです。学生は、英米の小説・詩・演劇を読み、そこに描かれている自然・人間・社会について考察し、日本とは異なる文化や歴史に対する理解を深めながら、自分なりの解釈を探る作業を通じてより広い視野を獲得していきます。それは、「21世紀を切り拓く心豊かでたくましい日本人の育成を目指すという観点」からも重要であり、日本人として、またグローバル化する時代における人間として、いかに生きるべきかという問いへの導き手となり得る、真に創造的かつ、コミュニケーション力豊かな教員の育成に寄与するものであります。

## 【学科として養成したい教員像】

本学は親鸞聖人の仏教精神を大学の教育理念に戴き、学祖清沢・佐々木による仏教精神の近代化の試みを経て、現代にもその建学の精神を生かすために、これまでも積極的に教員養成に取り組んできました。その中でも本学科では、人間が他者と生きるために必要な「ことば」によって構築された文学作品の読解を通じて、物語世界の背景に人間の文化や社会を看取り、人間の心の深層を理解し、そこから自己理解、さらには他者理解、そして共感能力を培うことをめざしています。

現代の我が国の児童・生徒をめぐる諸々の問題をかえりみると、仏教精神に基づく宗教的情操と共に、言語活動の充実を図る創造性とコミュニケーション能力を備えた教員の必要性が強く感じられます。今後の教育現場においては、価値観の多様化とグローバル化という一見矛盾した両ベクトルに対応しなければならないからです。他者なしに自己は生きられないように、グローバル化の進んだ今日の世界において、他国なしに自国だけでやっていくことは事実上不可能であり、教員はこれまで自分の生きてきた世界とは異なる価値観や文化に対する理解を深める必要があります。また、国の内外で政治・経済の変動が激化しつつあり、国内では少子化や子どもの貧困化が進んでいます。こうした問題にも教員は現実的・具体的な対応を迫られます。

そのため、文学科において養成したい教員像とは、文学作品の読解によって養われた「ことば」への感覚と思考力・判断力・表現力を基に、「ことば」を学ぶことの意味と、「ことば」の背景に目を向けることの重要性を生徒たちに伝えることができる教員です。つまり、英語を始めとする外国語を学ぶためには、言語だけでなく、その背景にある文化・社会・歴史を理解しようとするのが大切であることを、自らの体験と実践を踏まえて教えることのできる教員です。グローバル化が進む現代社会において、外国語学習を通じて異文化への想像力を養うことができ、仏教精神に基づく他者への理解と共感能力によって、生徒たちひとりひとりの教育的ニーズに細やかに対応できる教員を養成したいと考えています。